

## [調査研究]

## 奈良絵本・御伽草紙・舞の本・仮名草紙について

## — 和漢書貴重図書目録の周辺 —

大原 理恵

## 1. はじめに

本稿は、前稿<sup>1</sup>に引き続き、平成 17 年度版『東北大学附属図書館本館所蔵 貴重図書目録 和漢書篇』の補足として目録の記述方針・昭和 11 年版及び昭和 36 年度版『別置本目録』との相違等について記述するものである。

平成 17 年度版目録は貴重図書を大きく「古写本・古刊本」「原本稿本名家書入手沢本」「書画画図」「稀本」に分けている。今回は「稀本」のうち「奈良絵本」及び「御伽草紙」「舞の本」「仮名草紙」を対象とする。

なお、前稿「錦絵・絵本について」のほか、「公平本（金平本）について」<sup>2</sup>にも本稿の内容と関連するところがあるので、参照をお願いしたい。

前回とりあげた「絵本」は、全て刊本（木版印刷）でほぼ全丁に絵が入るなど、絵が中心となっている。今回は、奈良絵本を中心とする肉筆の挿画のある写本の仮名の物語類と、刊本の挿画のある仮名物語類である。いずれも、貴重書としての評価は、本文についての評価の他に、その挿画によるところが少なくかったものと推定される。

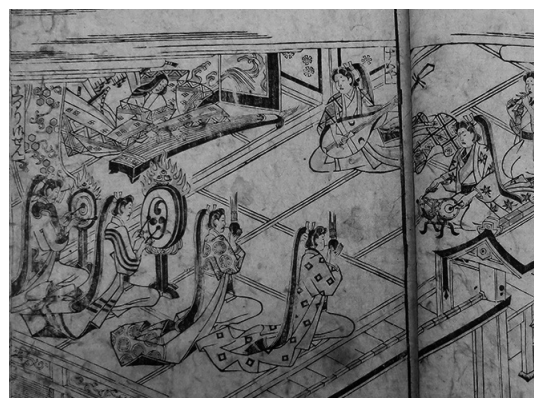
「国内の主なコレクションめぐり」徳江元正（『御伽草子の世界』奈良絵本国際研究会編 三省堂 1982 年）は、「既に翻刻されているものはあらかじめ読み尽くし、カードをとってしまったというような、御伽草子の研究を著実に具体的に推し進めている若き学究が、次の段階として、若しコレクション巡りを志す場合に、手がけて然るべき作品を、私なりに任意指摘する」（218 頁）という趣旨の下に「みちのくから南下して、日本縦断を試みよう」と、まず東北大学附属図書館の蔵書から紹介する。

しかし「図書館や文庫に収蔵されている代表的な稀書・善本の類を並べ挙げてゆくつもりもない」「刊本も取り扱わない」（218 頁）方針であるので、当然『別置本目録』収載の貴重書は取り上げられていない。

一方、奈良絵本を除けば、狩野文庫から選ばれた御伽草紙類別置本は全て刊本である。これは、目的・観点の違いを示すものと思われる。



奈良絵本 ふんしやう 挿画（部分）



刊本 上留りごぜん十二たんさうし 挿画（部分）

1 「錦絵・絵本について — 和漢書貴重図書目録の周辺 —」大原理恵『東北大学附属図書館調査研究室年報』7 東北大学附属図書館 2020 年 3 月

2 「公平本（金平本）について — 和漢書貴重図書目録の周辺 —」大原理恵『東北大学附属図書館調査研究室年報』3 東北大学附属図書館 2016 年 3 月

『古版小説挿畫史』水谷弓彦(初版:昭和10年 大岡山書店)<sup>3</sup>の序詞(昭和9年12月)には近世の書物における挿画の重要性について次のように述べる。

江戸時代(中略)小説といはず、あらゆる仮名書は、絵入本を第一義として刊行されるに至つた。

或場合には絵が小説よりも優越の地位を占め、然らざるも、対等・互角の勢力を張つたことは、決して珍しくなかつた。

また、挿絵は、作品鑑賞だけではなく、書誌研究からも重視される。

従来、古板本の調査研究が行はれて居らず、殊に挿絵についての調査が、意外に粗略にされてゐた爲に、刊年記のない本の年代考察が、殆どデタラメであつて、後進をして、誤らしめるものが多い。

『室町時代物語集 第三』横山重・太田武夫校定 井上書房 昭和37年 674頁

本稿においても、こうした挿画の重要性から、末尾に挿画面像を集めてみたので、御参照いただきたい。

## 2.「奈良絵本」「御伽草紙」「舞の本」「仮名草紙」の目録構成と記述

『古版小説挿畫史』は、「古版小説に挿絵を有するもので、最も早いものと言へば、先づ第一に、嵯峨本の『伊勢物語』に指を屈せねばなるまい。」<sup>4</sup>としている。



嵯峨本 伊勢物語 阿 5-117 表紙と挿画

この嵯峨本『伊勢物語』は、附属図書館にも所蔵しているが、『貴重図書目録』では、「古写本・古刊本」

の「国書」に含まれている。今回対象とする「奈良絵本」「御伽草紙」「舞の本」「仮名草紙」の分類は、当然「画図絵巻物」「絵本」との関連が強く、また、次の「浮世草紙」にも連なつてゆくのだが、「国書」に含まれる資料もまた、観点によってはこちらに分類しても違和感のないものもある。中世と近世、刊本と写本のまじりあい、つながりをたどることもできよう。

この分類では狩野文庫以外からの選定が比較的多いのも、注目される点である。

前稿「錦絵・絵本について」(注1参照)に記したが、『別置本目録』においては「絵本」に分類されていた奈良絵本は、平成17年度版『貴重図書目録』で新たに「奈良絵本」の分類を稀本の最初に置き、ここに移した。

竹とり 伊 9-611

←(狩野文庫)画図 書画及絵巻物 絵本 地図—絵本  
ふんしやう 伊 6-617

←(狩野文庫)画図 書画及絵巻物 絵本 地図—絵本  
しつか 延 4-1601

←(狩野文庫以外)画図 書画及絵巻物 絵本—絵本

また、『貴重図書目録』編纂時に新たに貴重図書に指定した奈良絵本を加えた。すべて狩野文庫以外である。

○住古物語 延 -1603 (丁 B 1-9-14)

○繪あはせ 延 -1604 (丁 B 1-9-15)

○きまんたう物語 延 -1605 (KG175/023)

○中將ひめ 延 -1606 (丁 B 1-9-11)

○たまみつ 延 -1607 (丁 B 1-9-7)

○たまみつ 延 -1608 (丁 B 1-9-13) ※絵なし

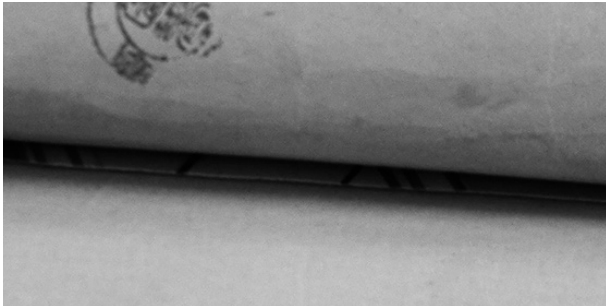
○みしま 延 -1609 (丁 B 1-9-12) ※絵なし

○左古路毛 延 -1610 (913-291) ※絵なし

これらが別置されてこなかったのは、その多くが昭和34年に部局で購入した図書であることから、本館の指定の対象から離れていたということが考えられる。また、挿絵が全て切り取られているものがあり、その貴重図書としての評価は別種のものになるが、本来奈良絵本であることから合わせて指定した。

3 引用は 水谷不倒著作集 第五巻 中央公論社 昭和48年10月 による。

4 水谷不倒著作集 第五巻 19頁



奈良絵本 挿画が切取られた状態

先に示した「国内の主なコレクションめぐり」徳江元正<sup>5</sup>では、当時はまだ貴重図書に指定されていなかった『繪あはせ』(延-1604)・『みしま』(延-1609)・『たまみつ』(延-1607)・『たまみつ』(延-1608)が取り上げられている。

奈良絵本の分類の資料配列は、本が最も大きく絵が細密である『ふんしやう』(伊6-617)を最初にし、作品の成立が古い『竹とり』(伊9-611)・『住吉物語』(延-1603)をその次に置いた。『しつか』(延4-1601)は、以前からの貴重図書であったためその次になっている。挿絵の切り取られている3点は最後に置いた。内容上関連のある『繪あはせ』(延-1604)・『きまんたう物語』(延-1605)、『たまみつ』(延-1607)・『たまみつ』(延-1608)は続けて配列した。『たまみつ』(延-1608)・『みしま』(延-1609)は旧蔵者が同じであるため続けて配列した。

奈良絵本については、表紙についての記述および本文の行数を追加した。

『しつか』(延4-1601)は『別置本目録』では「静」であるが、題簽の表記に従い「しつか」とした。



御伽草子類の書名の表記は、仮名が多く用いられているが、これには問題がある。例えば、図書館でしばしば展示している『ふんしやう』(伊6-617)についても、

熟練館員が表記そのままに発音してしまうといったことが起こる。そこで、今回検索の便宜も考え「文正草子」という書名を添えたが、他の仮名の多い資料名についても同様の処置を行うべきであったかもしれない。『左古路毛』(延-1610)については、「さごろも」の表記を添えた。『竹とり』(伊9-611)には「竹取物語」の書名を添えた。

『左古路毛』(延-1610)には、冒頭の句を書き添えた。それは、平安時代物語の「狭衣物語」と区別する目的であるが、また概ねの本文系統の手がかりとするためでもある。この問題については後述する。

『竹とり』(伊9-611)は竹取物語写本としての観点から「『竹取物語』の書誌学的研究」「校訂校本竹取物語」神藤豊(古典研究 6-6 1941年6月)に取り上げられている。また近年奈良絵本としての観点から「『竹取物語』奈良絵本・絵巻の伝本」曾根誠一(花園大学文学部研究紀要 48 2016年)「東北大学附属図書館蔵狩野文庫本の奈良絵本『竹とり』について 中巻の錯簡等と図絵の解説」曾根誠一(花園大学日本文学論究 9 2016年12月)で紹介されている。

『繪あはせ』(延-1604)は昭和34年受入<sup>5</sup>だが、末巻が欠けているものと推測され<sup>6</sup>ていた。『きまんたう物語』(延-1605)は近年の受入で、その欠けていた末巻と推測されている<sup>7</sup>。双方に共通して繰り返し現れる金地に紅白の花の図が印象に残る。



奈良絵本『繪あはせ』(延-1604)

『みしま』(延-1609)は、『中世神道物語』村上学校注(神道大系 文学編2 神道大系編纂会 平成元年)に翻刻紹介されている。

5 『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』ではこの資料が2点に分けられて記述されている。受入カードを確認すると、一〜三と四が分かれて受入れられており、それを反映したものと思われる。現在は1点として扱っている。なお、受入カード・

『古典分類目録』では「繪あわせ」。

6 『室町時代物語集』四 解題

7 この資料の受入に当たっては多くの方々の御配慮・御協力をいただいた。ここに感謝申し上げる。



## 奈良絵本の後に

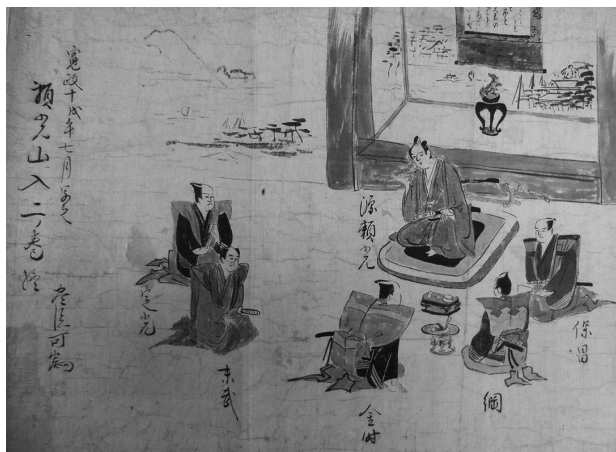
○天神本地 延-1948 (丁B 1-7-122)

頼光山入 延4-1652 ← (狩野文庫以外) 画図 書画  
及絵巻物 絵本一書画及絵巻物

頼光大江山入 延4-1602 ← (狩野文庫以外) 画図 書  
画及絵巻物 絵本一絵本

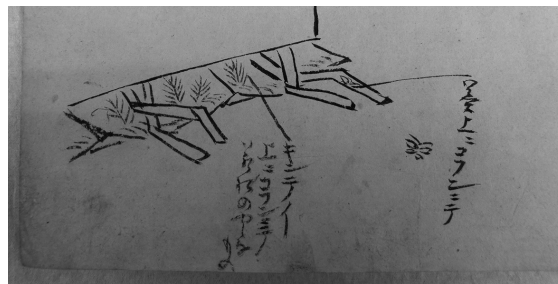
を置いた。『天神本地』(延-1948)は貴重図書目録編纂時に新たに指定した。『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』では「御伽草子」に分類され、「室町古鈔本」と記述する。奈良絵本類と同じ昭和34年に同じ古書肆より購入され、コレクションとしての関連性も考えここに置いた。挿画はない。『国書総目録』で「天神の本地」写本に「東北大(一冊)」とあるのが本書と思われるが、本文は群書類従『北野縁起(飛鳥井本)』に近い。

『頼光山入』(延4-1552)は、「寛政十年豊臣可爲寫」という従来の記述を踏襲している。豊臣可爲(浮田一蕙)は寛政7年生とされているので問題はあるが、絵巻末尾の記載に従っている。



『頼光山入』(延4-1552) 末尾

『頼光大江山入』(延4-1602)は、文章はなく、扇形に収めた絵のみである。ただし、場面の説明・色や模様



『頼光大江山入』(延4-1602) 部分

についての注記などが記された図もある。

なお、『頼光大江山入』(延4-1602)『頼光山入』(延4-1552)は同じ古書肆から、昭和7年・昭和9年に購入している。この古書肆からは昭和6年にも、『仙臺祭禮行列』(延4-1151)を購入している。

貴重図書以外にも狩野文庫に『大江山繪巻』(5-16468-1)寛延四年 建範写 を所蔵している。



『大江山繪巻』(5-16468-1) ※狩野文庫データベース

御伽草紙・舞の本・仮名草紙については、『別置本目録』においては、まとめて五十音順に配列しているが、『貴重図書目録』では、分類し、それぞれを五十音に配列している。この分類の問題は後述する。

『別置本目録』絵本の分類から次の3点をここに移した。

繪合鑑 伊6-625

← (狩野文庫) 画図 書画及絵巻物 絵本 地図一絵本  
業平昔物語 伊6-613

← (狩野文庫) 画図 書画及絵巻物 絵本 地図一絵本  
變化はなし 伊6-618

← (狩野文庫) 画図 書画及絵巻物 絵本 地図一絵本

新規に追加したものはない。

「公平本(金平本)について」(注2参照)に記したように、「丹緑本」の記述は昭和36年度『別置本目録』から追加されている。『さくらの中將』(字3-705)につい



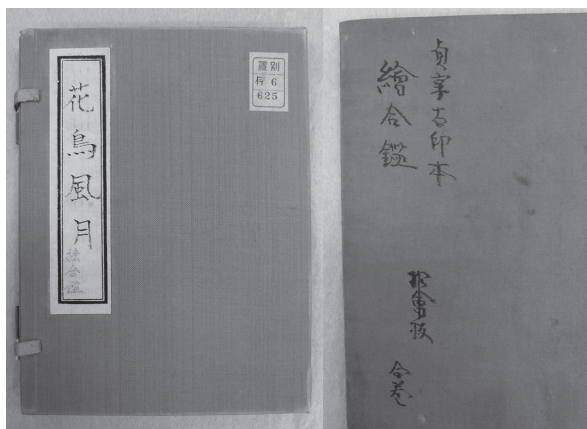
ては、『室町時代物語大成』五（横山重・松本隆信編 角川書店 昭和52年3月）解題の「江戸板に元来の丹緑本はない」（607頁）との見解を参考に、昭和36年度『別置本目録』の「丹緑本」の記述を「彩色（後補）」とした。『別置本目録』で「丹緑本」とされている他の資料の挿画彩色と並べてみると、たしかに違った印象を受けるが、丁寧な彩色ではあるので、その性質については検討が必要であろう。

『上留りごぜん十二たんさうし』（字3-706）は刊記等がないため、手がかりとして版式を追加した。なお、資料名は、『別置本目録』昭和11年版では「さうし」昭和36年度版では「そうし」となっている。『貴重図書目録』では、昭和36年度版を踏襲し、「そうし」としているが、原題簽には「さうし」とありこちらが適切である。

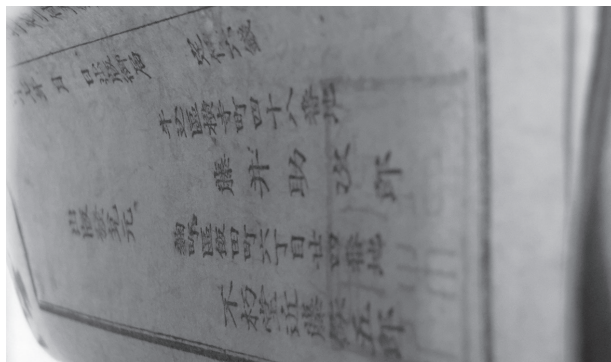
『繪合鑑』（伊6-625）の書名は柱題によるものであり、「花鳥風月」「新板源氏物語」の書名を添えた。帙（図書館で作成したもの）には「花鳥風月」の題簽がある。『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』では「御伽草子」に分類し、資料名を「花鳥風月」とする。『狩野文庫目録和書之部』（平成6年）では、資料名を「繪合鑑」とする。

『国書総目録』では「繪合鑑」にこの狩野文庫の1点のみが示されている。

表紙（後補）には「貞享古印本」の墨書があり、『別置本目録』では「貞享頃」と記しているが、削除した。また、明治期の出版物で裏打されている。「林忠正」の印記の記述は、昭和36年度版目録で追加されたものである。



『繪合鑑』（伊6-625）帙（左）表紙墨書（右）



『繪合鑑』（伊6-625）裏打

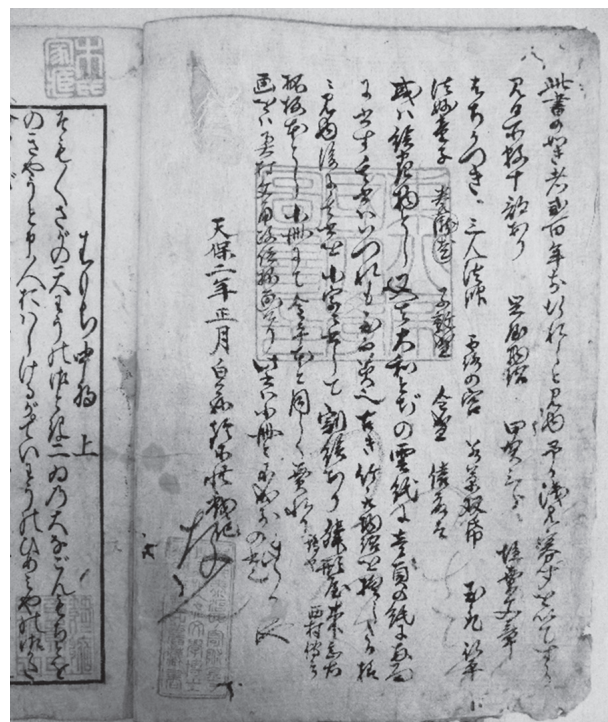
島津久基『近古小説新纂』中興館 昭和3年 には、次の3点が翻刻紹介されている。

あさかほのつゆのみや 字3-701

はもちの中將 字3-708

まんじゆのまへ 字3-710

『はもちの中將』（字3-708）については、鈴木白藤の考証なども注目されたのであろう。島津久基『近古小説新纂』にも翻刻紹介されている。



『はもちの中將』字3-708 第一冊前見返

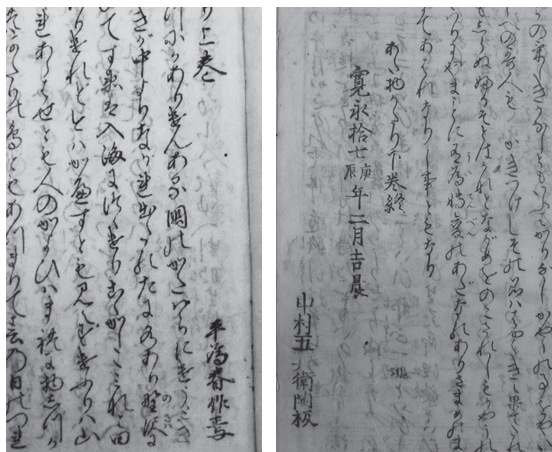
『ふじの人あなさうし』(宇3-709)について、横山重氏がこの作品の刊本で思わぬ苦勞をしたことを記している。(『書物搜索』上 横山重 角川書店 昭和53年)

どういいうわけか、富士の人穴に限って、奇妙に、零本や落丁本ばかりで、なかなか、うまく行かない。(156頁)

第二は、寛永九年板だ。この本で私どもは、成功した。私どもは、彰考館の本を見た。(中略)だが、この本もまた、(中略)つまり四丁半が落丁しているのだ。実に泣きたくなるようだ。(中略)案外容易に別本を見ることができた。それは東北大学図書館の、旧狩野文庫に、おなじ本があったからである。この本も一丁落ちているが、彰考館本で落ちている所がこれにあるから、両本で完全になった。(157頁)

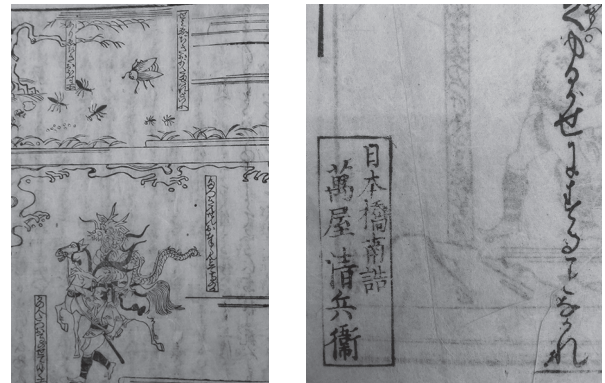
狩野文庫には、他にも刊本の御伽草紙・舞の本・仮名草紙類があり、「特別本」とされているものが少なくない。写本もある。その中からどのような基準で別置本を選定したのか、必ずしも明確ではない。だが、目録からは見えにくいものも、実物を並べてみると納得されることもあるように思われる。この分類の資料の多くが網羅的な調査により『室町時代物語集』『室町時代物語大成』『假名草子集成』に取り上げられている。

『あた物かたり』(宇3-702)は、資料のままに「平爲春」作と記述しているが、「三浦爲春」とするのが一般的である。この中村五兵衛板本は求板とされている(『假名草子集成』一 朝倉治彦編 東京堂出版 解題)。



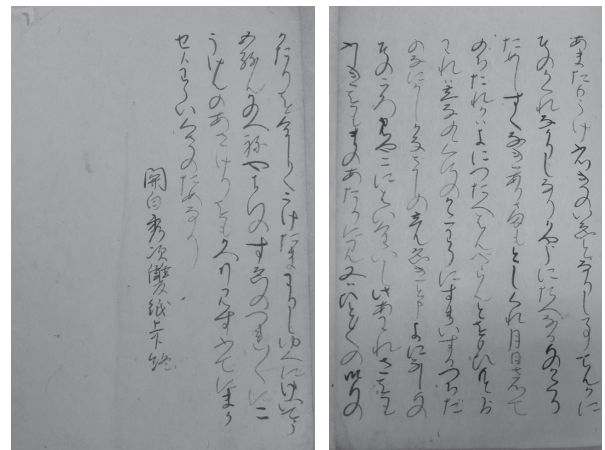
『あた物かたり』(宇3-702) 巻頭(左) 刊記(右)

『伊曾保物語』(宇3-703)は、近世初期の西洋文学受容の観点から重視される作品である。この萬屋清兵衛板本は万治板の求板とされている(『假名草子集成』三 解題)。



『伊曾保物語』(宇3-703) 挿画(左) 刊記(右)  
挿画上部は「アリとセミ」の寓話

『關白殿物語』(延4-1701)写本は、『関白秀次物語』のこと」松原一義(『古代の東北 歴史と民俗』木本好信編 高科書店 1989年)に翻刻紹介されている。下巻第三十七丁に、作者として「しなのゝくにのかたわらにすまひするつちだのなにかしかなざしのしんゑきと申よになしもの」成立時として「けいてう五ねんかのへねやよひのすゑ」の記述があることを指摘する。

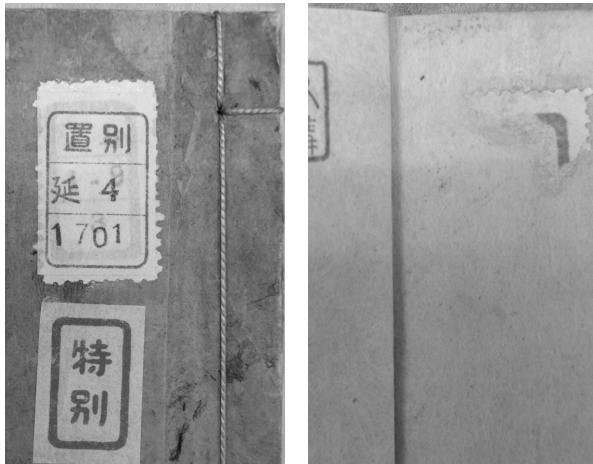


『關白殿物語』(延4-1701) 末尾

なお、論文等で「狩野文庫」と紹介されている資料が、「狩野文庫」由来のものではないことは時々見られ、その原因の一つは別置本特有の管理にある。別置本は、普通書・特別本を別置する場合、それまでの請求記号を抹消し、新たな記号番号を付与する。利用者が直接資料を調べても「狩野文庫」由来であるか否かはわからない。『別置本目録』では、「狩野文庫」由来のものと、



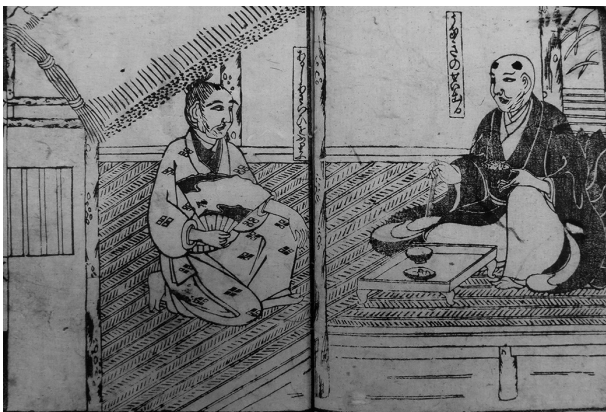
その他を分けて記載しているが、『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』や『国書総目録』を通して資料請求する利用者は、そうした事情には気づきにくい。今回『貴重図書目録』では、「狩野文庫」由来の貴重書には、元の狩野文庫の番号を併記したが、それではこの問題に対応できない。今後の課題である。



『關白殿物語』(延 4-1701)  
表紙(左) 元のラベルの上から別置ラベルを貼っている  
末尾(右) 元のラベルをはがしたあと

『業平昔物語』(伊 6-613)は、菱川師宣画であることが別置理由であったと考えられる。

『変化はなし』(伊 6-618)は、謎の多い資料である。「「変化はなし」成立考—狩野文庫の一零本について」坂巻甲太(成城文芸 66 1973年6月)に翻刻紹介され、内容から寛文3・4年の成立かとの考察がある。そして「文章構成が稚拙であるのに比し、挿画はかなりすぐれたできばえのように思われる」(6頁)と評価されているが、もともと絵本に分類されていたことから、挿画が主な別置理由であったと推測される。『仮名草子集成』(第六十一巻 東京堂出版 2019年)にも挿絵とともに翻刻紹介



『変化はなし』(伊 6-618) 挿絵

されている。

### 3. 「御伽草紙」「舞の本」「仮名草紙」の分類について

「御伽草紙」「舞の本」「仮名草紙」の分類は、先に記したように『貴重図書目録』においてはそれぞれに分けたが、『別置本目録』ではまとめて配列している。

これは、狩野文庫の分類でも同様に、「御伽草紙 仮名草紙類 附舞之本」となっている。ただ、実際には、第4門 語学 文学—文学—国文学—散文 の分類の「物語」に「御伽草紙 仮名草紙類」に分類されるべきものが入っている。本館旧片平古典分類では、「丁B 1-9 御伽草紙 附仮名草紙」という分類になっている。物語・御伽草子・仮名草子の扱いは連続的であったといえる。

□本館旧片平古典分類 ※狩野文庫以外

丁B 文学—丁B 1 国文学

丁B 1-6 日記紀行

丁B 1-7 物語草紙

丁B 1-8 戦記

丁B 1-9 御伽草紙 附仮名草紙

丁B 1-10 浮世草紙

□狩野文庫分類

第4門 語学 文学—文学—国文学—散文

日記 紀行

物語

和文

消息文

戦記物

御伽草紙 仮名草紙類 附舞之本

『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』では、五 言語 文学 の下に、次のように

(一一) 物語 説話 御伽草子— 六 御伽草子

(一二) 江戸小説— 二 仮名草子

異なる時代の産物として、御伽草子と仮名草子を明確に分離している。

さらに、『古典分類目録』の「仮名草子」の分類を見ると、たとえば『別置本目録』では「西鶴本及浮世草紙」に分類される『浅草拾遺物語』(宇 3-801)『雨中友』(宇 3-803)なども入っている。このことは、続稿において扱うことにしたい。

水谷不倒著作集 第六巻 中央公論社 昭和50年1月「編集後記」によれば『西鶴本』(水谷不倒)に掲載された『假名草子』(水谷不倒・大正8年序) 広告には「假名草子は徳川の初期、寛永を中心として前後七八十年間に行はれたる版本の戯作をいふ。即ち物語あり、咄本あり、お伽草子、舞の本、軍書、名所記、狂歌其他すべて娯楽的閑文字を含む。」(388-389頁)とあり、「假名草子」かなり融通自在な概念となっている。

一方、狩野文庫の分類では、「舞の本」と「幸若舞」は明確に区別し、第4門 語学 文学—文学—国文学—散文 の分類の一つとして「御伽草紙 仮名草紙類 附舞之本」がまとめられ、第5門 美術 工芸 技芸—音楽—古代楽—平家 田楽 能 謡曲 の下に「能 謡曲 狂言 幸若」の分類が設けられている。

しかし、『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』では、六 音楽 演劇—(四) 中世歌謡 舞曲—五 幸若 宴曲 に舞の本も分類されている。

「幸若舞曲の諸本に就いて(上)」笹野堅(国語と国文学 11-11 昭和9年11月)は舞の本について、

かの舞の本が幸若舞の衰退した徳川時代の初期の刊行であるといふばかりでなく、(中略)それは決して正本として出版されたものではなく、読物乃至小説としての意識のもとに印行されたものであつたと思はれる(以下略) (24頁・通頁1742)

謂はゆる舞の本は、徳川時代の初期に於ける文学の要請が、室町時代の絵巻や奈良絵本や単なる写本などの読物であつたもの、或は幸若舞の歌詞を読物としたもので、幸若舞の台本、舞曲の正本とは相違したものである。(27頁・通頁1745)

と、明確に区別すべきであるとしている。

「幸若舞曲と室町物語」石川透<sup>8</sup>は、奈良絵本や刊本の作成者も読者もそのジャンルの区別は意識していなかったのではないかと推測する。

幸若舞曲を読み物として刊行した場合、その作品は室町物語の刊本と何ら変わることがなく、編集者はもちろん、当時の読者もその違いを意識していなかったであろう (320頁)

奈良絵本になった場合、見た目には、室町物語と幸若舞曲との区

別はできない。もし題名の欠けている奈良絵本があった場合、その文章と絵だけで、区別するのは至難の業となるであろう。(中略)そして奈良絵本を作る側も、おそらくは幸若舞曲と室町物語との区別をしていなかったのではないだろうか。(333頁)

奈良絵本は『東北大学所蔵和漢書古典分類目録』では、『竹とり』(伊9-611)・『住吉物語』(延-1603)も含め、「御伽草子」に分類されているが、何故か『繪あはせ』(延-1604)のみは、七 美術 芸道(五) 図譜 画集—四 絵本 に分類されている。

『左古路毛』(延-1610)は「作り物語」に分類されており、分類からは平安時代物語「狭衣物語」の写本となってしまう。逆に、『竹とり』(伊9-611)は「作り物語」に分類すべき<sup>9</sup>であろう。しかし、奈良絵本という形態が、分類意識を曖昧にしまい、作る側も区別していない、ということも想定できる。

受容や研究の立場からは、融通を認めたいところであるが、目録を作成する立場はまた違う。ただ電子化目録においては、別な工夫も期待できよう。

#### 4.複製・電子化資料について

奈良絵本といえば、図書館における電子化資料の花形のように思われるが、東北大学附属図書館では現在、貴重図書奈良絵本の全画像公開は行っていない。これは、東北大学附属図書館の狩野文庫マイクロ化事業の際、カラー撮影が第3門の地図・第5門の絵本・絵巻等を中心に行われ<sup>10</sup>、それを基礎に電子資料公開が行われてきたため、『ふんしやう』(伊6-617)(4-11638-3)をはじめ4門に分類されている奈良絵本類はそこに含まれていなかった。また、狩野文庫以外の古典の電子化も進行しなかった。

現在、国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」において、東北大学附属図書館本館所蔵の和書古典籍貴重図書の電子化が見込まれている。「はじめに」で紹介した「若き学究」が「既に翻刻されているものはあらかじめ読み尽くし」「次の段階として(中略)コレクション巡りを志す」といったありかたも大きく変わりゆく状況であるが、貴重図書の電子化については、これらの事業の進行状況を見

8 『奈良絵本・絵巻の生成』石川透 三弥井書店 2003年 第四編 第一章 初出「幸若舞曲と室町物語」石川透 『伝承文学研究』49 1999年9月

9 狩野文庫の分類では、「物語」に分類。ただし、上述の通り、この「物語」には「御伽草紙 仮名草紙類」に分類されるべき

ものも含まれている。

10 「「狩野文庫目録和書之部」成立の経緯」狩野文庫マイクロ化編集室 『東北大学附属図書館研究年報』28 平成7年12月 195頁等



て、あらためて報告を行うことにしたい。

(おおはら りえ，東北大学学術資源研究公開  
センター助教・附属図書館協力研究員)

【目録訂正】

- 「上留りごぜん」十二たんそうし（字 3-706）→「上留り  
ごぜん」十二たんさうし（字 3-706）
- 十二たんそうし」（原題簽）→ 十二たんさうし」  
（原題簽）

前稿訂正：「錦絵・絵本について ― 和漢書貴重図書目録の周辺  
―」大原理恵『東北大学附属図書館調査研究室年報』7 東北大  
学附属図書館 2020 年 3 月 注 1

東北大学附属図書館 2018 年 9 月⇒2019 年 3 月

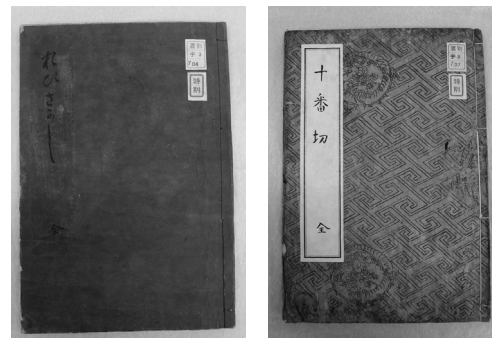
## 【表紙一覧】



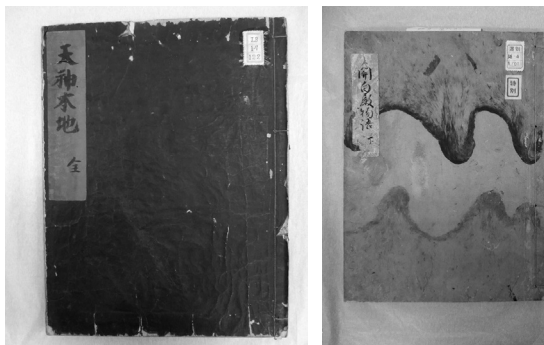
【たまみつ 延-1607】【住吉物語 延-1603】

【まんじゆのまへ 宇3-710】  
【ふじの人あなさうし 宇3-709】

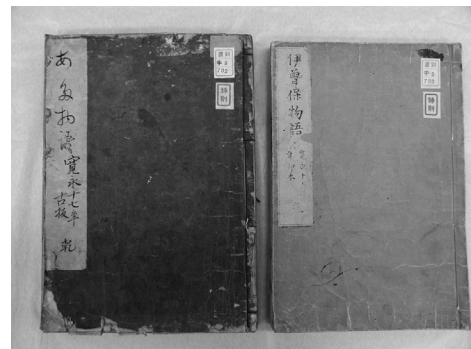
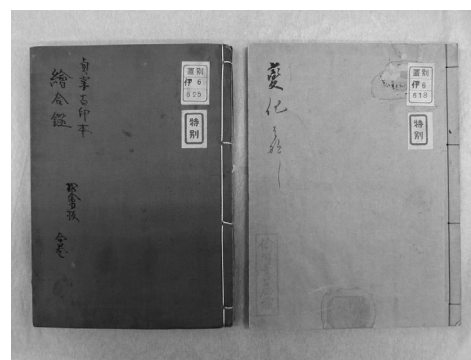
【たまみつ 延-1608 延-1607】



【おひさかし 宇3-704】【十番切 宇3-707】



【天神本地 延-1948】【關白殿物語 延4-1701】

【あた物かたり 宇3-702】  
【伊曾保物語 宇3-703】【あさかほのつゆのみや 宇3-701】  
【さくらの中將 宇3-705】

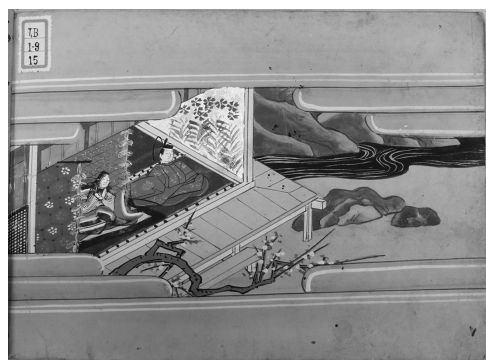
【繪合鑑 伊6-625】【變化はなし 伊6-618】



挿画一覧（奈良絵本）



【竹とり 伊 9-611】



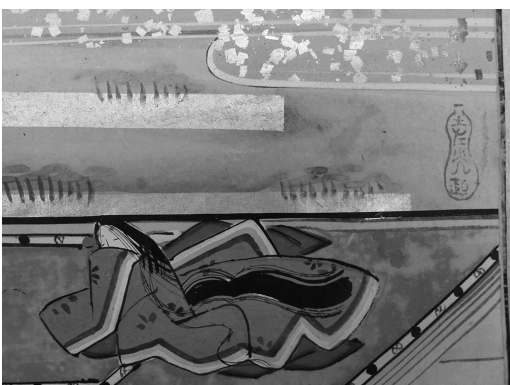
【繪あはせ 延 -1604】



【住吉物語 延 -1603】



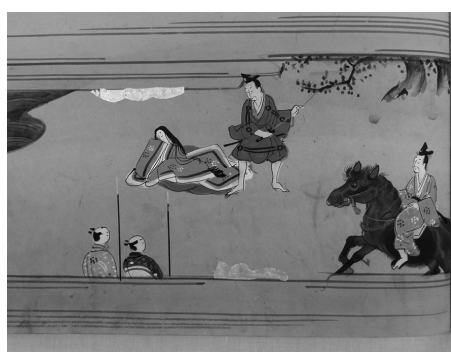
【きまんたう物語 延 -1605】



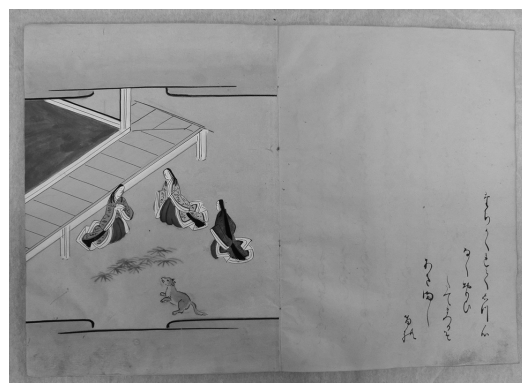
【住吉物語 延 -1603】 ※「土佐光起」の印



【中將ひめ 延 -1606】部分



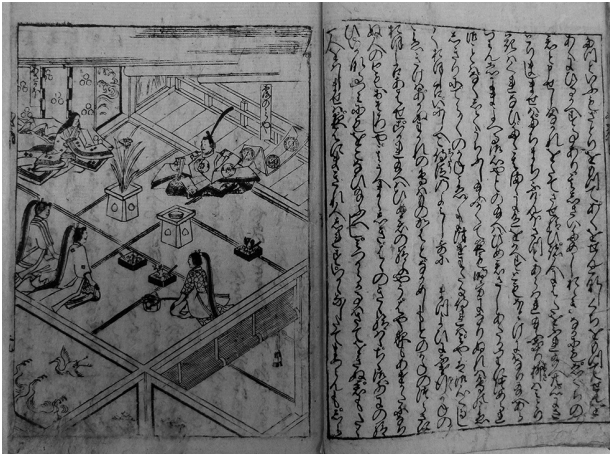
【しつか 延 4-1601】



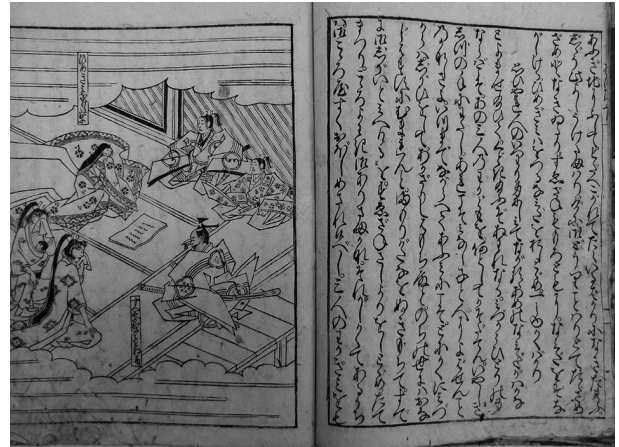
【たまみつ 延 -1607】



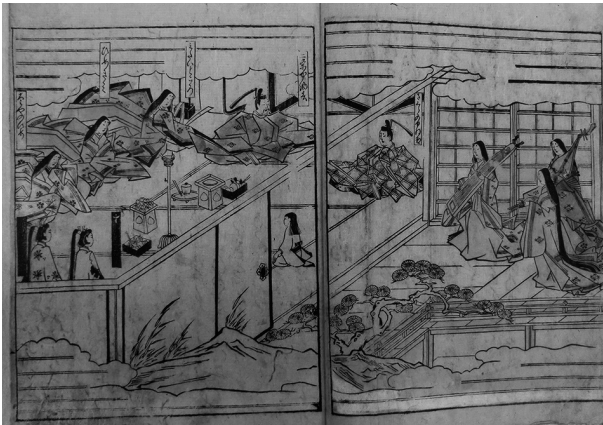
## 挿画一覧 (刊本)



【あさかほのつゆのみや 宇 3-701】



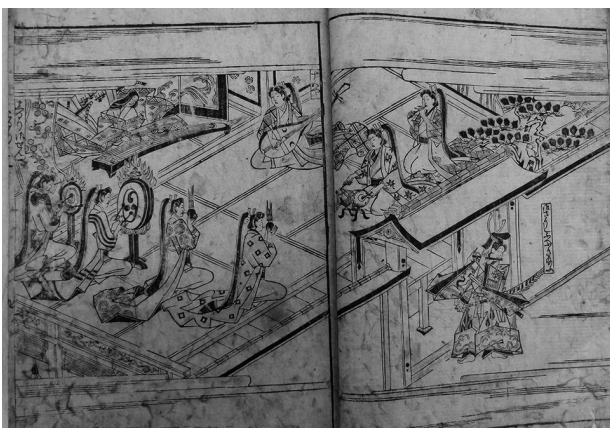
【はもちの中將 宇 3-708】



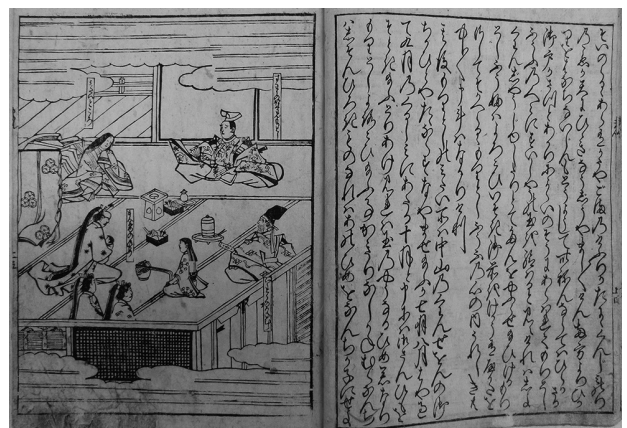
【さくらの中將 宇 3-705】



【ふじの人あなさうし 宇 3-709】

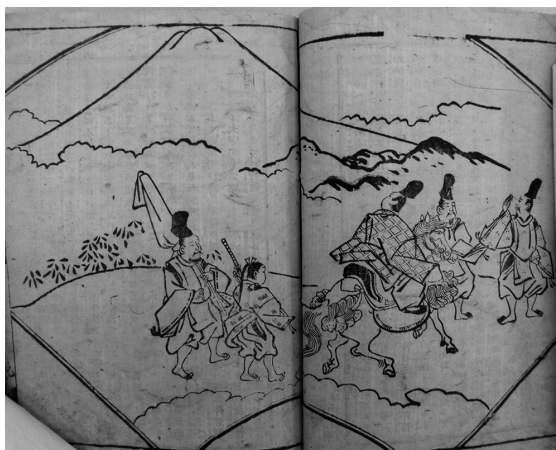


【上留りごぜん 十二たんさうし 宇 3-706】



【まんじゆのまへ 宇 3-710】

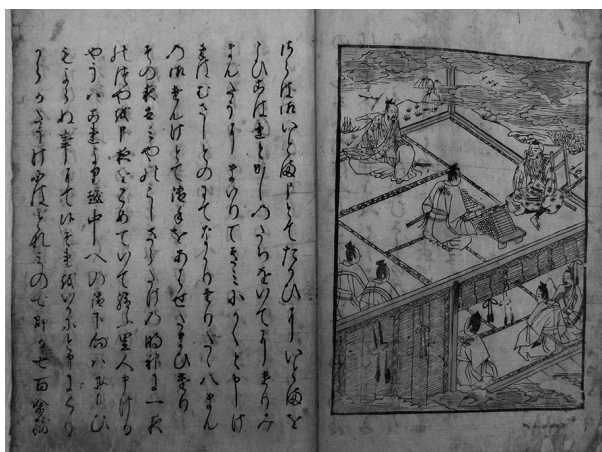




【繪合鑑 伊 6-625】



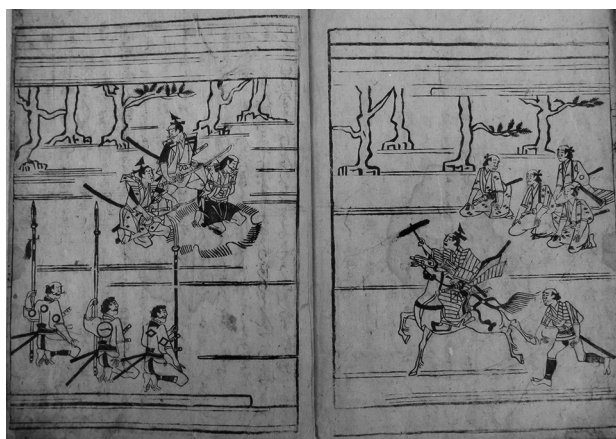
【あた物かたり 宇 3-702】



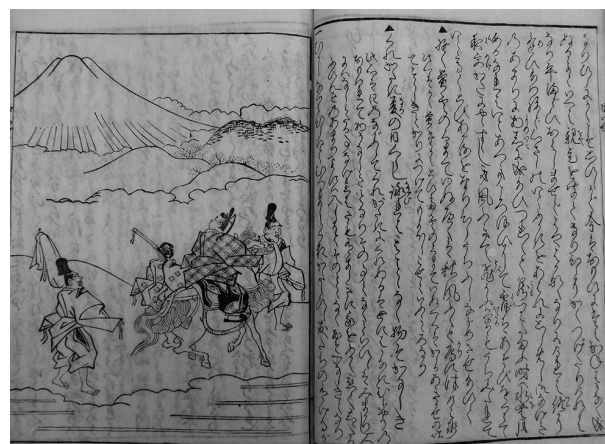
【おひさかし 宇 3-704】



【伊曾保物語 宇 3-703】



【十番切 宇 3-707】



【業平昔物語 伊 6-613】